

滝川 優子 (たきかわ ゆうこ) さん だいち代表取締役

田中 由紀 (たなか ゆき) さん わっと代表取締役



二人の出会いが作った
充実の住宅型有料老人ホームは
連携機関に「こんな施設が
作りたかった」と言わせた

なでしこ力

Power of Nadeshiko

訪問看護ステーション「さくら」(名古屋市中川区)を運営し、利用者が安心できる看護サービスを目指す「だいち」の代表取締役の滝川優子さん。納得いく住宅型有料老人ホームづくりを続けていた「わっと」の田中由紀さん。二人の出会いが、利用者も納得する施設を作り上げた。

「大きな家」をイメージした有料老人ホーム

名古屋市中川区にある住宅型有料老人ホーム「福和苑」「富和苑」「桜和苑」の3施設は、田中さんが代表をつとめる「わっと」が運営している。3施設とも同じ作りで1つのフロアを中心に広い共有スペースがあり、ここを囲むように両サイドに利用者の個室などが並ぶ。「大きな家」をイメージした造りである。「自室に居ても他の利用者の声や気配を感じることで利用者が孤独感を感じにくい、プライバシーのある居室という考えです。これだとスタッフの目が全室に届きやすいのです」と田中さん。

トイレ、風呂、洗面台は共同で個室とは別にあり、利用者はそのたびに部屋から出ることになる。広々とした共有スペースには、事務作業をするスタッフも利用者もあり、自然と顔を合わせて会話を交わす。

ハード面とソフト面、両面の充実

滝川さんが経営する訪問看護ステーション「さくら」は現在、名古屋市内全域で24時間、看護師らが対応し医療介護保険サービスを行っている。対象は新生児から高齢者まで。在宅酸素療法

や、医療処置が必要な利用者にも対応している。田中さんの3つの施設は、「さくら」と連携しスタッフが24時間対応、利用者の看護やケア、看取りまでトータルで行う。

同様の施設に10カ所以上の取材経験がある筆者が「利用者の表情が豊かで、館内に活気や生活感がある」と強く感じたのは、ハード面とソフトの両面の充実が利用者に安心感を与えているからだろう。同施設の担当医は「こんな施設がつくりたかった」と話しているというのも納得できた。

二人の出会いと 생각이施設に反映

8年前、共通の知人のケアマネージャーが、「考え方の合いそうな人がいる」と滝川さんと田中さんを引き合わせた。田中さんが運営している「福和苑」を見学した滝川さんは、「これだ!と思いました」とふりかえった。「納得する施設を建てたい」と考える訪問看護ステーションの代表の滝川さんと、「施設の介護などソフト面の充実」を考える住宅型有料老人ホーム運営者の田中さんの出会いだった。

当初は、お互いのノウハウを学び合うだけのつもりだったが、「施設運営は田中さん」、「施設利



福和苑外観 (2014年開設)



富和苑外観 (2020年開設)



桜和苑外観 (2023年開設)



広い共有スペースを囲むように個室がある（右奥に個室の入口が見える）
 用者の看護は滝川さん」と、それぞれの専門性を生かすことがベストだという結論に。これにより田中さんの3施設と、滝川さんの訪問看護ステーション「さくら」が連携。滝川さんは、自身の訪問看護ステーション事務所が入る建物のすぐ近くに、自分が納得できる住宅型有料老人ホームをつくりあげた。

介護業務の充実への長い道のり

滝川さんが助産師として働いていた2012年当時、当直看護師が不在の施設が多く、施設の当直の介護スタッフの相談先が無く、現場が困ることがあった。相談を受ける機会があった滝川さんは、訪問看護ステーションの存在と必要性を知り、2012年、訪問看護ステーションを自ら設立した。助産師として12年のキャリアはあったが、介護に関しては素人。同業者の横のつながりも無かった。看護師、理学療法士、作業療法士などの有資格者を集めることが難しく、医療保険・介護保険、複雑な訪問看護の制度や手続き、日進月歩の介護用品についてなどの知識も無い。「訪問看護ステーションの運用のノウハウや実情を知らずに始めました」と滝川さん。

有資格者が行う仕事以外（手続きなどの事務や情報収集など）すべてを滝川さんが行い、睡眠時間を削って激務に立ち向かった。数年後、ようやく相談者に対して提案ができるまでになると、「有料老人ホームを作りたい」と考えるようになった。

「介護のプロでなく素人だからできた」

一方、中川区尾頭橋の飲食店で働いていた田中さん。昔からの下町で「ここでずっと暮らしたい」という年配の人が多い地域だ。近隣で独居男性の孤独死を知りショックを受け、「微力ながら地域の方に貢献できることはないか」と、オーナーと考えるようになった。

思い切って住宅型有料老人ホームをオーナーが建設、少人数のスタッフでスタートしたが、利用者が全く集まらない。もともと飲食店勤務希望だった田中さんも介護に関して素人での出発だった。そこで国の指導を受けながら、資格がなくても出

来る事（夜勤・配膳）はほぼ全て行い、途中の時間で睡眠を取る日々を繰り返した。常に『自分の親なら家族ならこうして欲しい』という思いを持つ。田中さんは自分の施設のソフト面の充実などに努め、9カ月後には満室に。その6年後には、隣地に2棟目の施設「富和苑」を運営した。

「住宅型有料老人ホームを作りたい」と考え、各施設を見学していた滝川さん。「どれもちょっと違う」と感じていた時期に、「考え方が合う人がいる」と、共通の知人のケアマネジャーの紹介で、田中さんの施設「福和苑」を見学した。利用者目線を貫く二人の縁がつながり、皆が納得する施設が生まれることになった。

二人が見据える未来

田中さんは「連携機関の協力と共に、日々悔いのないケアを心がけています。お看取りの際にはスタッフが『一緒に過ごせた良い思い出を心に』『ありがとう』と言えるようになれば。この思想が働く環境を明るくし、助け合える関係に発展すると考えています。人生の先輩方の時間でいえばほんの一瞬ですが、住み慣れた自宅から施設へお引越しをされる中で、不安がなく自宅のような生活を、自分らしく過ごせる時間を大切に、利用者さんと1日1回笑顔になる…施設を笑顔溢れる場所にしたいです」。

滝川さんは「看護の現場では、どうしても医療的観点から利用者さんを見がちですが、利用者さんからは人生最期のひとときまでその人らしく生きるという力強さを感じます。その姿に敬意を抱き、寄り添いながら関わり続けたい。訪問看護を通して地域貢献し、次の世代につなげていければ。訪問看護は女性が多く働く職場ですので、女性がライフステージに抱えやすい問題にも仕事を継続できるように全面的にバックアップしていきたいです」と滝川さん。

二人それぞれの思いが大きな柱になり、施設がより盤石になっていくのを予感させた。

（塩崎 記子）



滝川 優子さん



田中 由紀さん